あるむぜお56

府中市郷土の森博物館だより　al museo NO. 56　2001年6月20日

2 ケヤキ並木Part1　源頼義・義家奉納伝承を検証する

3 展示会への招待　「木とのふれあいワールド展」

4-5 ノート　「武蔵鐙」－武蔵国司は帰らない

6 最近の発掘調査　国府でオンザロック 古代「氷室」発見？

7 収蔵資料の紹介　大国魂神社に6つの本殿？　～『日本鹿子』

8-9 インフォメーション

10 ナチュラルセブン　第5話「別世界の旋律」

ケヤキ並木 Part1

表紙写真　神社側から見た大正期の「馬場大門ケヤキ並木」
大国魂神社の境内から旧甲州街道を隔てて北へ、およそ600 m続く。並木に挟まれた中央の道を大門、並木の両側の道筋を馬場と呼ぶ。かつて、大門は窪み、並木の部分は土手状になっていたというが、その頃の写真は残されていない。右手前の大樹は、1951年の台風で折れた御神木。残念ながら内部は腐朽し、年輪を数えることはできなかったが、推定では樹齢700年という。

源頼義・義家奉納伝承を検証する

深澤　靖幸

府中の街なかを南北に貫く緑のベルト「馬場大門ケヤキ並木」は、1924年（大正13）に国の天然記念物の指定を受けました。今でこそ各地に天然記念物がありますが、ナント！「ケヤキ並木」は天然記念物指定の第2号でした。まさに府中のシンボルといってよいでしょう。

この「けやき並木」の来歴については、およそ次のように説明されることが多いようです。

〈平安時代の後期、奥州・安倍氏との戦い（前九年の役 1051～62）に際して、六所宮（今の大国魂神社）に戦勝を祈願した源頼義・義家父子が、凱旋の時、樹苗1000株を寄進したのが始まりである。その後、江戸時代の初期には、大坂の陣における徳川方の戦勝祈願の報賽として、家康により左右の馬場二条が寄進され、苗木が植栽された。これが今日残るケヤキ並木である。〉

しかし、この説明は残念ながら、伝承の域を出るものではありません。もっとも、1678年（延宝6）の検地帳に「馬場東」「馬場先」の小字が見えますので、これ以前に馬場が成立していたことは確実ですし、六所宮は17世紀初頭に幕府の手によって大規模な造営がなされていますので、家康の頃に「ケヤキ並木」が今日の姿に近付いたと判断して誤りはありません。

問題は、源頼義・義家父子を絡めたルーツの伝承です。この伝承は、1624年（寛永元）に作成された『六所宮縁起』に〈社地に千本の苗木を植えた〉とあるのが始まりのようです。この社地がどこを指すのかは明らかではありませんが、1780年（安永9）成立の『武蔵演路』という地誌には〈一ノ鳥居の並木を寄付した〉とあり、1800年（寛政12）成立の『六所宮伝記』にも〈樹苗千株報賽し、これが今鳥居内の両辺にある喬木である〉とあって、「ケヤキ並木」であることは明らかです。こうした記述が以後盛んになる地誌に受け継がれて行くようです。

このように定説化の道筋を辿ることはできても、『縁起』に先立つ良好な史料や資料を見出せない現時点では、この伝承の真偽を明らかにするのは困難です。

ただ、そうしたなかで、注目できるのは『源威集』にある次のような記述です。

〈前九年の役を擁護するため、源頼義が南向きの六所宮を北向きに改めた。〉

『源威集』は、源氏の威勢を広めるために著された歴史評論書で、成立は14世紀後半とされています。書物の性格上、脚色や創作も少なくないでしょうが、全くのフィクションでは役割を果たせません。この書が著された時点で六所宮が北を向いていたことは確実視してよいでしょう。そしてそれは、頼義によってなされたと認識されていたのです。前九年の役から既に300年の時を経ていますから、史実であるか問題が残るとはいえ、『縁起』と同じ舞台設定である点で見過ごせません。北向きに建て替えれば、新たな参道も必要となったはずです。そこに「ケヤキ並木」の植栽がなされたとしても不思議はないでしょう。間接的ながら、『源威集』の記述の中にも、頼義・義家にまつわる「ケヤキ並木」の成立伝承が潜んでいるのではないでしょうか。そしてそれは、府中という地域を越えた広い範囲で説得力をもつ伝承だったと考えられます。

ところで『源威集』は、版本として刊行されることなく、写本すらほとんど存在の知られていない、マイナーな書物でした。したがって、『縁起』の制作にあたって、この『源威集』の記述が参考にされたとは思えません。そうであるならば、『縁起』を嚆矢とする江戸時代の伝承は、府中という地域に残された何らかの記憶を手掛かりにしたのだと考えるべきです。

結局のところ、「ケヤキ並木」のルーツが源頼義・義家父子にあるのか、明確な答えを出すことはできません。しかし、六所宮と頼義・義家父子の結びつきの強さが、地域社会を越えた説得力をもち、そして地域社会のなかで極めて長い期間にわたって伝承されてきたことは確かなようです。

「木とのふれあいワールド展」

親子で遊ぶ

7/20(祝)
⇩
8/31(金)

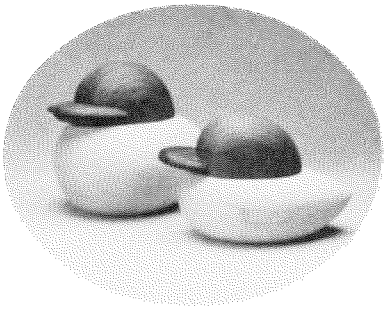
自然の中で育まれていたかつての子供たちは、森や林の木々に日毎親しむとともに、遊び道具などを自由に作り出してきました。現代文明の潮流に揉まれながら生きている今の子供たちは、プラスチックなどの人工素材を当たり前のように使いこなし、もはや木は扱いにくいものとして認識しています。

考える所、子供の感性が養われる一番大切な時期に、母なる「木」から学ぶ術が失われているのです。あまりにも便利で快適な生活は、創造する感性を子供から奪い取ってしまったのです。

考える

本展では、木を素材に製作された数々の作品を紹介し、これら木とのふれあいを通じて忘れかけていた「ぬくもり」や「香り」を体感してもらうものです。
そして本来子供たちが持っている、大人たちには及びもつかない豊かな発想力を呼び起こしたいと思います。

木は種類によって姿も違えば、使われ方も様々です。特に日本は、四季の移り変わりを通じて豊かな自然に恵まれているため、ヒノキやケヤキに代表される木の種類が豊富です。それぞれの種類ごとに色・香り・木肌・木目の特色が異なり、昔から衣食住のすべてにわたって利用されてきました。人は木の特色を如何に理解し、その良さを生かすためにどのような使い方をしてきたのか、色々な視点で考えてみることにしましょう。



見る

様々な鳥の表情や特色を捉えた木の造形、それぞれが異なる木の材質で作られた動物や形のパズル、用途別で様々な形や構造を持つ引出しの取っ手、実に多様な木の加工例をまずはその目でじっくりとご覧ください。
そして手で実際に触れてみてください。目では見えなかった形の特色が、確実に浮き彫りにされるはずです。

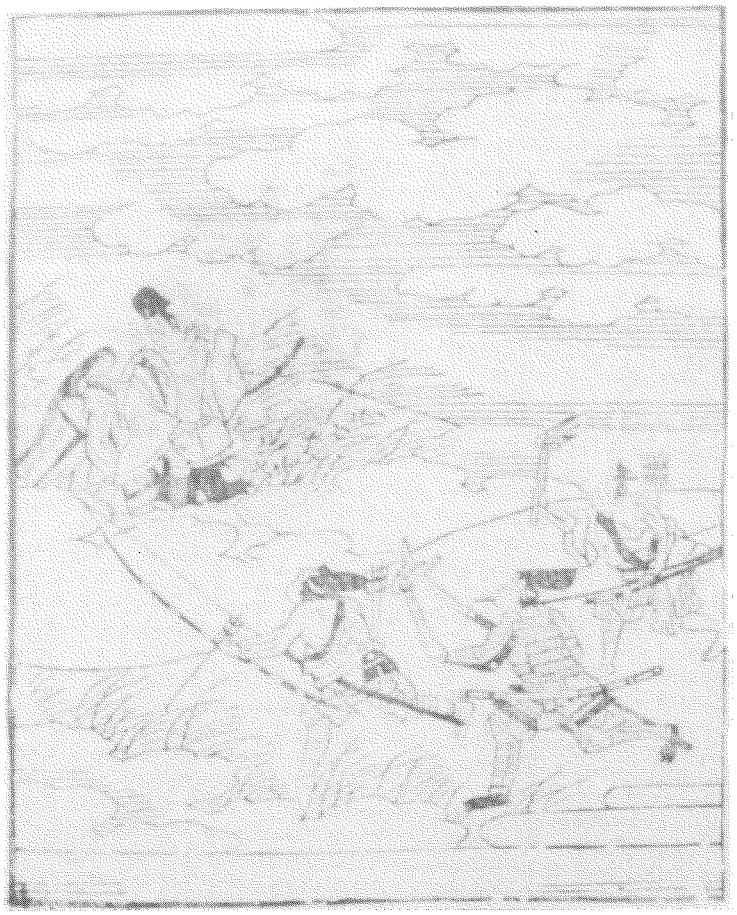
遊ぶ

木のボールでいっぱいの、言わば木の砂場には、何とも表現しがたい暖かさとやわらかさが同居しています。この中に入ることで、木の香りやぬくもりを五感で理解することができます。また、建築・家具などに多く使われている木組みを体験することで、日本が生んだ伝統文化の偉大さを理解することも可能です。こんな木とのふれあい・遊びの体験が、新たな創造のヒントに繋がればと期待しています。 *(Nakamura)*

NOTE

「武蔵鐙」－武蔵国司は帰らない

小野　一之



武蔵野の物語　（『絵入伊勢物語』　本館所蔵）

▼ 日本一短い恋文

〈聞ゆればはづかし、聞えねば苦し〉

平安時代の初め頃、「武蔵なる男」（武蔵に住みついた男）は、「京なる女」（都に残してきた女）に、こう一言書いた手紙を送りました。

「お手紙書くのは恥かしいのですが、書かないでいるのはもっと苦しいのです」と。そして、上書きに「武蔵鐙（むさしあぶみ）」と書き添えて。

これだけなら、初々しい心温まるラヴレターですが、さすが『伊勢物語』主人公の色男だけあって、どうやらウラがあるようです。「武蔵鐙」の一語に即座に反応した女性もお見事でした。彼女は次のような歌を返してきました。

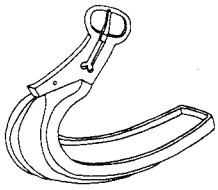
〈武蔵鐙さすがにかけてたのむには 問はぬもつらし問ふもうるさし〉

「武蔵鐙に足を掛けるように頼ってきましたのに、手紙をもらえないのはつらかったのです。しかし、（もう別れようという決定的な）知らせをもらうのはもっとつらいのです」と。なんと胸の傷む言葉でしょうか。

きっと「武蔵鐙」の言葉に、二人のやりとりの重要なポイントが隠されているに違いありません。

▼ 武蔵鐙の秘密

鐙というのは馬具のひとつで、馬に跨（またが）る人が足を引っ掛ける道具のことです。鞍（くら）の両側にぶら下げて使います。「武蔵鐙」はその一形式で、ベルトとの接続部分に透（す）かし文様入りの鉄板を用いたタイプ。貴族や武家の晴の舞台用でしたが、後に広く普及しました。当初は武蔵の特産品だったからこう呼ばれたのでしょうが、実態はよくわかっていません。



武蔵鐙　（『有職故実大辞典』）

男が手紙に「武蔵鐙」と書き添えた理由は、これが武蔵からの便りであることを示すとともに、鐙と「逢（あ）

う」を掛けて、自分は武蔵で新しい女ができてしまったと、告白しているのではないでしょうか。また、「はつかし」（恥かしい）と言ったのは、不倫？を申し訳なく思ったか、あるいは、武蔵の田舎娘を相手にしている自分が都の女に対して恥かしいと感じたからなのでしょう。

ともあれ、武蔵に住みついた男は、京都に残した女性に「木綿のハンカチーフ」ならぬ「武蔵鐙」（ただし、字だけ）を送りつけてきたというわけです。これを「雅び」というか、キザと思うか、まどろっこしいと感じるか、ふざけていると怒るかは、時代的また個人的な趣味によるといえるでしょう。

ちなみに、 女のこの歌を見てたまらなくなった男は、

〈問へばいふ問はねばうらむ武蔵鐙 かかる折にや人は死ぬらむ〉という歌を返しています。悩むくらいならいっそう死んでしまいたい、と男は言うけれど、もはや口先だけみたいに聞こえてしまいます。

▼ 伊勢物語の東下り

さて、この話が登場する『伊勢物語』は、主人公があちこちで起こす恋愛事件を基本テーマにしています。在原業平とその仲間たち（9世紀後半の政治的には非主流派の顔ぶれ）のサロンで拵えられた「歌物語」が原作となって形が整えられたと考えられます。

高望みの女性をやっとの思いで得て、必死で「芥川」を逃げる途中、あえなく奪い返されたのをきっかけに、男は京に居づらくなり、東国めざして旅に出かけます。こうして主人公の「東下り」が始まるのです。

「八橋」「宇津の山」「隅田川」などと続く道行きではひたすら望郷の念にかられていたのですが、武蔵国に来たとたんにいつものクセが出てしまいます。最初の舞台は入間郡みよしのの里でした（第10段）。さっそく男が通じたのは藤原氏を母とする娘です。ともに京都出身だというわけで、主人公と娘の母との間で交感の歌が取り交わされました。『伊勢物語』の多くの段の主人公は業平と目されますが、この話は、按察使として公務で東国に出かけた源融がモデルではないかという説があります。彼は業平らのサロンのパトロン的存在だったと言われています。相手は入間郡の郡司クラスの有力豪族の子女でしょうか。

第12段の舞台は、武蔵野です。ここでも娘を捕らえた男は武蔵野に逃走し、国守（国司の長官）に追いかけられます。二人が潜む野に火を点けられそうになると、健気に歌を詠むのは娘の方です。

〈武蔵野は今日はな焼きそ 若草のつまもこもれり我もこもれり〉

この武蔵野は、武蔵野台地の広大な原野と普通は考えられています。ところが、『万葉集』東歌のなかで5首ほど詠まれた情景からすれば、古代の武蔵野は国府の街を取り囲んでいた野原と見るべきでしょう。国府にやってきた男が女と郊外に逃げたのです。わざわざ国守が出てくることからすれば、女性は身分の高い、もしかしたら国守の娘でしょうか。

そして、第13段目が先の「武蔵鐙」の話です。中世の『伊勢物語』注釈書の『冷泉家流伊勢物語抄』では、この段の「武蔵なる男」の意味は、業平の舅の紀有常が武蔵守だった時（ただしこの事実は知られていません）、業平が有常の家に一緒に住んだからだと書かれています。

▼ 都に帰りたくない国司

都の貴族が国司として各地方の国府に赴任して政務を執るのが、律令国家のシステムでした。ところが当時は、国司に任命されても都に残る場合や、逆に任期が切れても地方に居座り勢力基盤を拡充する国司が横行しました。平将門の乱を起こした人物も、こうして土着した一族の中から出ました。藤原実方や菅原道真のように、左遷目的で遠くの地方官に任じられる例もありました。こうしたなか、国司と在地勢力との対立抗争も生まれてきます。

土地の有力者の女性と結ばれ、土着化を図り、新任の国司と争う。『伊勢物語』の「東下り」の主人公たちの姿に、こうした国司たちの動きが反映されているように見えないでしょうか。

『冷泉家流伊勢物語抄』には、こんな興味深い話も載っています。文武天皇の頃、小野美作吾という人が武蔵守として長年在国していたが、たまたま都に上った時に病気になってしまう。ここで自分が死んでも、武蔵に運んで埋めてくれと遺言したが、守られずにいると祟りをなした。そこで武蔵から土を運んで、奈良の春日野に塚を築いた、というのです。

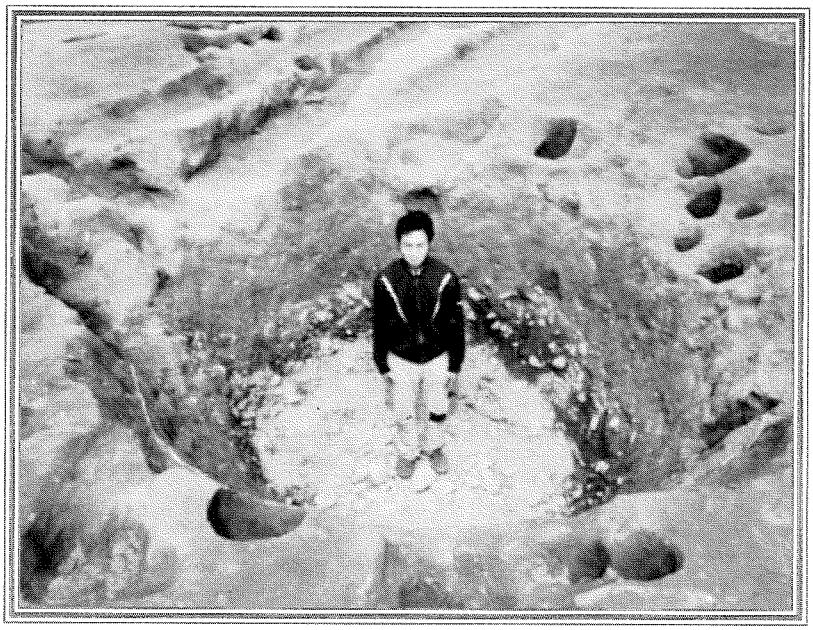
この武蔵国司も任地に強い執着を示しています。小野美作吾という人物は他に知られていませんが、武蔵で小野氏と言えば、多磨郡小野郷を基盤に、国司を兼帯し、多摩川を挟んで国府対岸の多摩丘陵谷戸部を開発し、小野牧（皇室の馬牧場）の経営者となった小野諸興などが思い浮かびます。彼らはやがて横山氏を名乗り、有力な武蔵武士団の一つを形成します。牧は横山荘・船木田荘という荘園に発展しました。

『冷泉家流伊勢物語抄』のこの話ばかりか、先の「武蔵鐙」の男に対しても、この小野氏を連想してしまうのは、馬具の「鐙」をさりげなく持ち出したところに、有力な牧経営者としての心意気を垣間見たからです。

最近の発掘調査

国府でオンザロック 古代の「氷室」発見？

（仮）府中宮西町1丁目マンション地区　府中市遺跡調査会　湯瀬禎彦



「氷室」と推定される竪穴

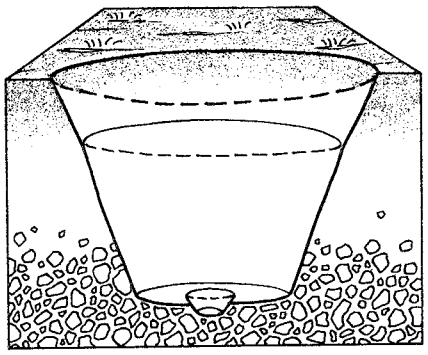
皆さんは、「氷室」をご存じですか。氷室は、冬に採取した天然氷を夏まで貯蔵しておくための施設です。家庭用冷蔵庫が普及し、コンビニでも簡単に氷が手に入る今日では、天然氷の需要がほとんどなくなり、氷室の存在も過去の記憶になりつつあるのではないでしょうか。けれども、昭和30年代までは、冬の寒さの厳しい山間部などで天然氷の製造が積極的に行われ、それを貯蔵するための氷室も活躍していました。

今回ご紹介するのは、その氷室跡－それも今から約1,000年前の－とみられる遺構についてです。発見場所は、京王線の南側に隣接するマンション建設予定地で、武蔵国府の国庁推定地（大国魂神社東側一帯）からは北西に約500m離れています。この付近は、竪穴住居跡が非常に少ない反面、とても規模の大きい掘立柱建物跡や武蔵国府の北西に鎮座する社とみられる遺構（本誌50号）などがあるため、国府の中でも一般的な生活とは異なる役割を持つ地域と思われます。

氷室とみられる遺構は、二つ発見されました。一つは円形、一つは方形状に掘り込まれた竪穴で、ともに数人の大人がすっぽりと隠れてしまうほどの大きさです。また、穴の底の部分は、関東ローム層の下にある小石や砂利の地盤（礫層）にまで達していて、底の真ん中が一段低く掘り下げてあるのが特徴です。

では、この遺構が、どうして氷室跡と考えられるのでしょうか。それは、まず発見された遺構の形状が、古代の文献などから読み取れる氷室の形状と似ているためです。また、今回発見された場所が、国府の中でも特殊な地域であることも理由にあげられます。さらには、発見された竪穴の底の様子が、貯えた氷がある程度溶けてしまうことに備え、穴の中に水が溜まらないように浸透性のよい礫層から水を地下へ逃がすために工夫した構造と思われることなどです。

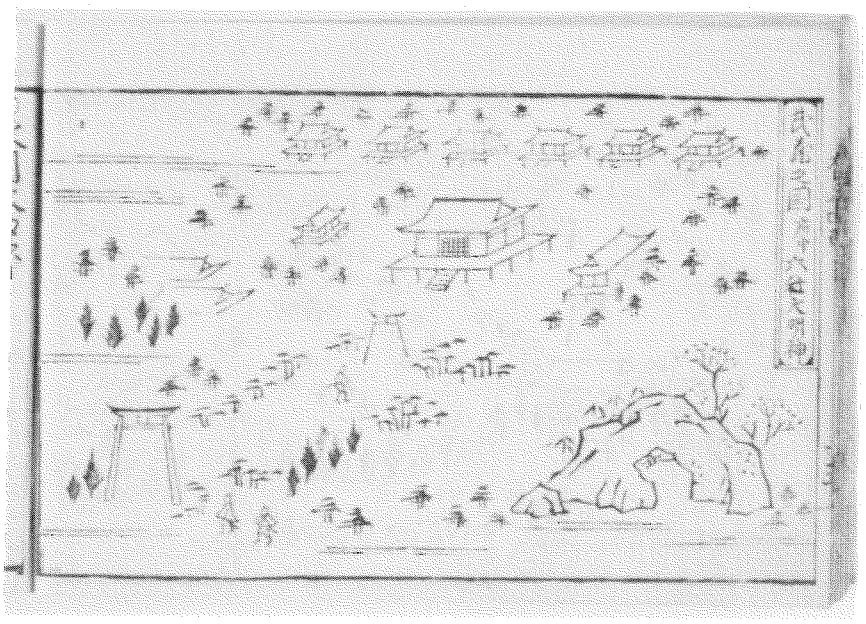
しかし、今回発見された二つの竪穴は、市内では初めて確認された形のため、古代の氷室跡と結論づけるには今後も様々な検討をする必要があります。奈良県の平城京長屋王邸の発掘調査では、約1,300年前に貴族が氷を入れたお酒を楽しんでいた可能性を窺わせる木簡が発見されて話題となりました。もし、今回府中で発見された竪穴が氷室跡であるならば、武蔵国府の人たちも暑い夏でも身近に氷があり、オンザロックを楽しんでいたかも知れません。



円形の「氷室」の概略図

上面の直径3.5m、深さ1.8mもある巨大な穴です。

古代の氷室に関しては、『日本書紀』が、穴の大きさや収蔵方法を記した唯一の文献です。これによれば氷室は、深さ約3mの穴の底に厚く茅や荻を敷いて氷を置き、その上を草で覆うのだといいます。



収蔵資料の紹介

大国魂神社に6つの本殿？
～『日本鹿子』

深澤　靖幸

「近世多摩のガイドブック」のタイトルで本館が所蔵する地誌を紹介したのは、昨年の春のミニ展でしたが、その後あらたに『日本鹿子』という地誌を収蔵することができました。『日本鹿子』の初版発行は1691年（元禄4）。江戸時代後期の19世紀がガイドブックの出版ブームであることからすると、かなり古い部類に入ります。

内容はといえば、その名の通り、全国版のガイドブックですから、多摩地方や府中の名所・旧跡が細かく取上げられている訳ではないのですが、上の写真のような挿絵があって、興味が引かれます。

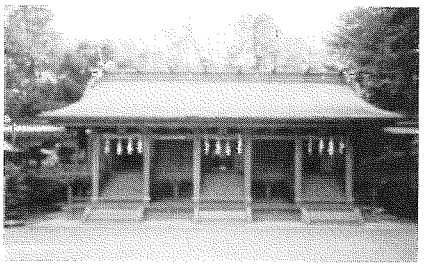
それは拝殿の後ろに6棟の本殿が並び建つ絵で、「武蔵之国府中六社大明神」とタイトルが付いているのです。府中六社大明神とは、六所大明神あるいは六所宮とも呼ばれた今日の大国魂神社のことです。したがって、このガイドブックが作られた当時、大国魂神社に6つの本殿があったことになります。序文を見ると、旅行した際のメモや実地の調査によって全国津々浦々の神社仏閣や名所名物を集めた、と記されているではありませんか。

いやいや、しかし、六所宮に6つの本殿があったなんて話は聞いたことがありません。六所宮は17世紀初頭に改造された社殿を1646（正保3）に焼失し、このうち本殿は1667年（寛文7）に再建され、今日に至っています。『日本鹿子』の発刊年からすれば、当然この流造り3棟を連結させた本殿がここに描かれていなければいけません。

そこで他の挿絵も見てみると、担当した画家には失礼ながら、いずれも写実性に欠けているといわざるを得ません。『国史大辞典』で「にほんかのこ」の項を引いても、旅行の際のメモや実地の調査に基くといいながら「にわかに信じがたい」と酷評されていました。6つの本殿は社名に牽かれた想像の産物だったのでしょうか。

ところが、そう簡単には言い切ってよいものか、難しい面もあります。全国版のガイドブックですから、その取材には相応の年月を必要としたはずです。参考とすべきガイドブックがほとんどない時代のことですから、なおさらです。1646年の焼失後、仮殿が建造され、これを『日本鹿子』が描いた可能性はないでしょうか。

むろん、想像の域を出るものではありません。全国版とはいえ20年以上もその取材に費やしたのか、疑問も感じます。ただ、六所宮では室町後期頃から江戸後期に至るまでの長い間、祭神が不明となって、大国魂神（オオナムチノミコト）とイザナミノミコトなど計6神を合わせ祀っていました。こうした事実を踏まえると、6つの本殿が並び建っていたとしても、あながち否定はできないのではないでしょうか。そうであるならば、この拙い絵は、六所宮にとって空白を埋める唯一の資料といえます。



大国魂神社本殿（都指定文化財）
1667年、将軍家綱の命によって再建。三間社流造りの社殿を3棟横に連結させた特殊な形式。

当時の史・資料が限られているなかで、この想像の当否を決定することは難しいでしょうが、六所宮だけでなく、『日本鹿子』に取上げられた他の寺社の挿絵をも検討することによって、事実に近づくことができるかもしれません。さらに調査を続けたいと思います。

INFORMATION

「郷土の森」から「郷土の森博物館」へ

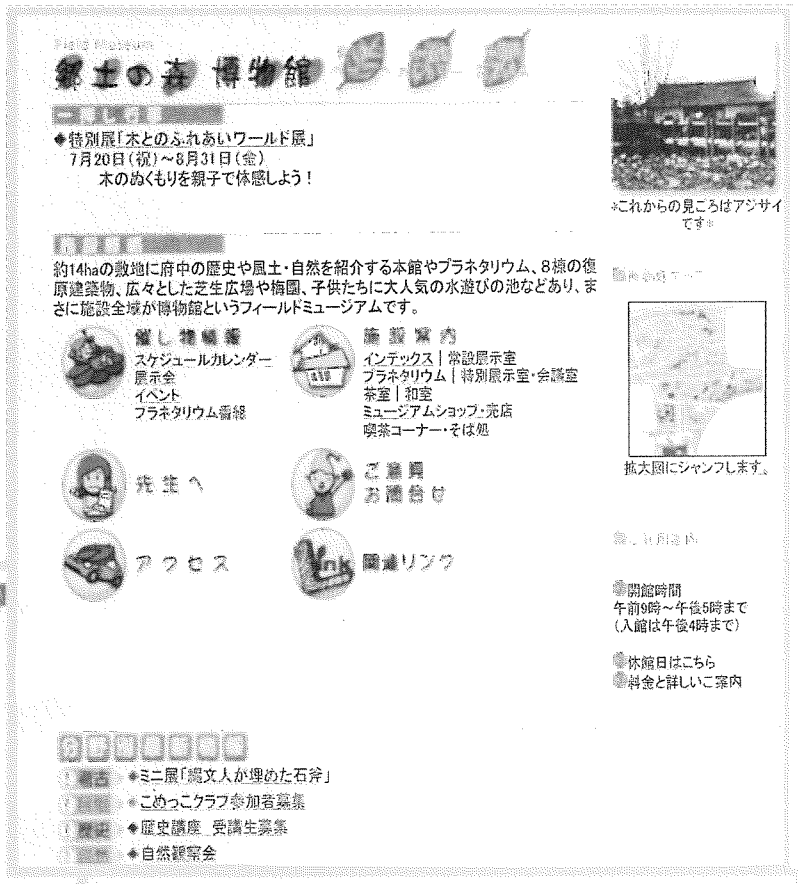
当館のオープンは、1987（昭和62）年。以来、古民家群や梅園のある広大なフィールドをもつことを最大の特色とする総合博物館として、親しまれてきました。

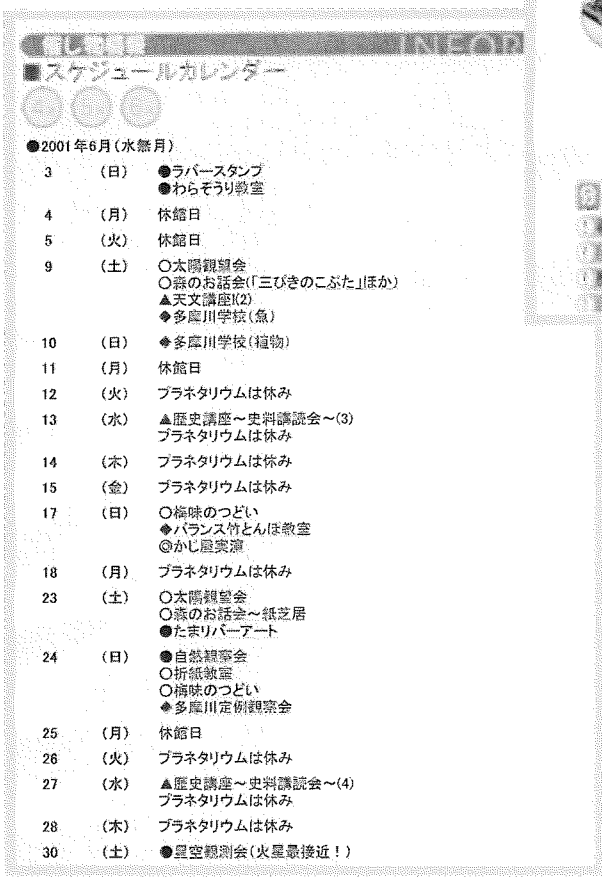
公園部分も含めて全体が博物館という認識で、つまり、郷土の森＝博物館という意味で、正式名称にはあえて博物館の文字を付しませんでした。ところが、これでは何の施設だかわからないとか、公園にたくさんの人が来てくれても展示室に入ってもらえないなどの、意見や現状がありまして、とうとう市条例改正のうえ、気分を一新。郷土の森が〈博物館〉機能をもった施設であることを、内外に対して自覚と認識を促す目的で、名称を「府中市郷土の森博物館」に改めました。その間には、世間の〈博物館〉という言葉の印象もずいぶん変わりました。古臭くもなく、堅苦しくもなく、もっともっと親しめる楽しい〈博物館〉をこれからもめざしていきます。

ホームページ完成！

「いよいよ」というか、「やっと」というか、郷土の森博物館のホームページが立ちあがりました。

特別展やミニ展の紹介はもちろん、季節の花ごよみや3か月分の行事案内など情報を満載。メールでお問い合わせいただけるページも用意しました。園内マップで知りたいポイントをクリックすれば、写真とともに施設の説明がポップアップします。遊び心いっぱいのホームページへぜひお立ち寄りください。

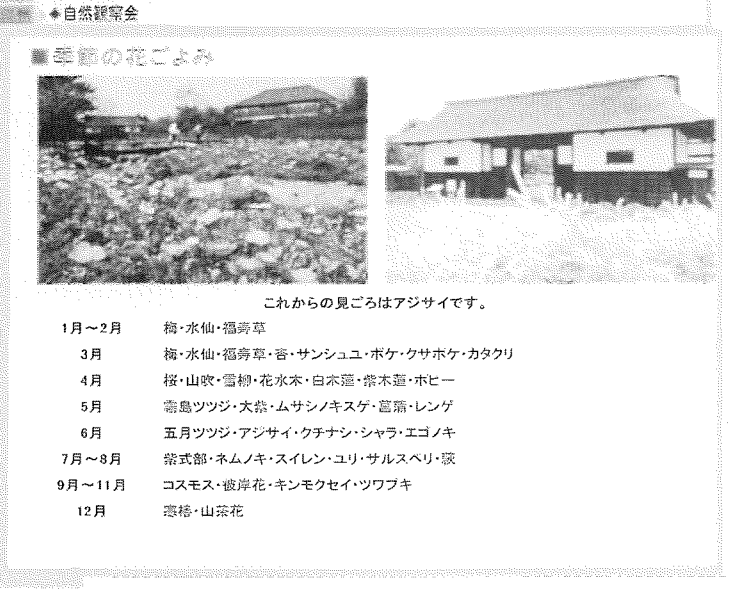




■スケジュールカレンダー

●2001年6月（水無月）

3	（日）	●ラバースタンプ ●わらぞうり教室
4	（月）	休館日
5	（火）	休館日
9	（土）	○太陽観望会 ○森のお話会（「三びきのこぶた」ほか） ▲天文講座Ⅱ(2) ◆多摩川学校（魚）
10	（日）	◆多摩川学校（植物）
11	（月）	休館日
12	（火）	プラネタリウムは休み
13	（水）	▲歴史講座～史料講読会～(3) プラネタリウムは休み
14	（木）	プラネタリウムは休み
15	（金）	プラネタリウムは休み
17	（日）	○梅味のつどい ◆バランス竹とんぼ教室 ◎かじ屋実演
18	（月）	プラネタリウムは休み
23	（土）	○太陽観望会 ○森のお話会～紙芝居 ●たまリバーアート
24	（日）	●自然観察会 ○折紙教室 ○梅味のつどい ◆多摩川定例観察会
25	（月）	休館日
26	（火）	プラネタリウムは休み
27	（水）	▲歴史講座～史料講読会～(4) プラネタリウムは休み
28	（木）	プラネタリウムは休み
30	（土）	●星空観測会（火星最接近！）



■季節の花ごよみ

これからの見ごろはアジサイです。

1月～2月	梅・水仙・福寿草
3月	梅・水仙・福寿草・春・サンシュユ・ボケ・クサボケ・カタクリ
4月	桜・山吹・雪柳・花水木・白木蓮・紫木蓮・ホヒー
5月	霧島ツツジ・大紫・ムサシノキスゲ・菖蒲・レンゲ
6月	五月ツツジ・アジサイ・クチナシ・シャラ・エゴノキ
7月～8月	紫式部・ネムノキ・スイレン・ユリ・サルスベリ・萩
9月～11月	コスモス・彼岸花・キンモクセイ・ツワブキ
12月	寒椿・山茶花

利用料金も改定

今回の名称変更とともに、名実ともに全体が〈博物館〉になりました。今までのように、公園と博物館という具合に料金を分けません。今までの入園料金のままでの一本化です。プラネタリウムと特別展は別ですが、事実上、常設展示室の無料化ということになります。こうして、郷土の森の核となる展示室をもっと気軽に楽しめることになります。ミニ展や展示替えもこれまで以上に充実させていきます。

区分		個人	団体（30人以上）
博物館観覧料	大人	100円	80円
	子供	50円	40円
プラネタリウム観覧料	大人	600円	480円
	子供	300円	240円

子供は4歳以上、中学生以下です。

新刊紹介

◆ 府中市郷土の森紀要　第14号

￥700

府中市に生息する注目すべきクモについて(Ⅳ)
萱嶋　泉

比企型陽刻剣頭文軒平瓦とその周辺
石川　安司

武蔵府中高安寺の中世瓦
深澤　靖幸

府中市域における延宝6年検地帳の分析
関根　恒男・齋地　徹

中世武蔵国府の「周縁」－合戦と開発－
小野　一之

◆ 府中市内家分け古文書目録4
八幡宿　田中家文書目録

￥200

◆ 府中市郷土の森博物館 ブックレット1
甲州街道 府中宿 府中宿再訪展図録

￥800

あるむぜおは定期購読できます

「あるむぜお」は春夏秋冬の年4回発行しています。希望者は、4回分の送料として、320円を添えて、本館1階の受付カウンターで申し込んでください。

平成12年度 寄贈資料一覧

	寄贈者	資料名	分類	数量
1	田中　正男	教科書	教育	一括
2	矢島　中	会議手帳 ほか（矢島中家文書追加分）	歴史	2点
3	矢島　中	書棚	民俗	2点
4	清野　利明	高安寺採集 中世瓦ほか	考古	一括
5	蔵持　大輔	三千人塚採集 板碑片	考古	1点
6	佐川　コト	絹織物	民俗	1点
7	関　英馬	三宅島のカゴ	民俗	1点
8	三岡　宏	古典籍類（三岡宏家文書　）	歴史	169点
9	市川　治郎	籾鎮圧器 ほか	民俗	7点
10	広瀬　孝昌	クルリ棒 ほか	民俗	9点
11	阿部倉義史	枡 ほか	民俗	4点
12	田口　浩	レコード（昭和20年～30年代のSP盤）	民俗	5点
13	篠崎　明生	棒秤 ほか	民俗	5点
14	相馬　尚教	行灯	民俗	1点
15	相馬　尚教	教科書	教育	一括
16	山下　博庸	湯たんぽ ほか	民俗	2点
17	三宮　克己	海軍水兵長の上陸札	民俗	1点
18	鳥山　民夫	府中尋常高等小学校新築落成記念 文鎮	教育	1点
19	内藤　顕輔	測量竿 ほか	民俗	一括

平成12年度利用状況

(H12.4.1～H13.3.31)

単位：人

区分		有料 一般	有料 団体	減免（障害者等）	合計
入園者 開園日数 307日	大人	171,759	11,390	13,767	196,916
	子供	47,830	39,526	5,696	93,052
	小計	219,589	50,916	19,463	289,968
博物館入館者 開館日数 307日	大人	10,481	3,327	2,002	15,810
	子供	3,749	10,496	208	14,453
	小計	14,230	13,823	2,210	30,263
プラネタリウム観覧者 投影日数 295日	大人	22,502	2,849	422	25,773
	子供	13,008	14,571	1,950	29,529
	小計	35,510	17,420	2,372	55,302
合計		269,329	82,159	24,045	375,533

ナチュラルセブン

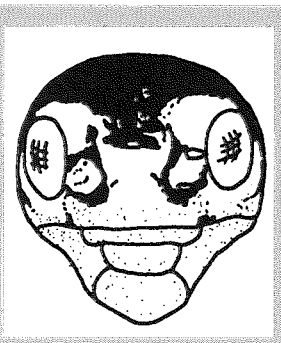
第5話　「別世界の旋律」

中村　武史

カワラエンマコオロギ？おそらくどの昆虫図鑑にも、記載されていない名前。では架空の生き物？まさか！いくら何でも学術的虚構は紹介しない。それは確実に存在していたのだ…しかもこの府中市で！時は今を遡ること14年前、このミステリアスな昆虫に関わる観察会で起こった衝撃のエピソードを公開しよう。名付けて「カワラエンマ・戦慄の旋律事件」。すべては事実に基づいた創造の世界…

「ねぇ、これ聴いてみて下さい、例のアレですよ。」昆虫班のヒラオカ団員が差し出した1本のカセットには、「カワラエンマ鳴き声」のタイトル表示があった。「よく手に入りましたねぇ、かなり貴重な音源ですよ、松浦先生からですね。」…そう、秋の夜長にコオロギの音を鑑賞する目的で、夜の多摩川観察会を企画していたのだ。ヒラオカ団員が苦労の末入手した鳴き声テープの主にはこんな背景がある。日本に生息するエンマコオロギ類にはエゾエンマコオロギ、エンマコオロギ、タイワンエンマコオロギの3種（小笠原諸島のムニンエンマコオロギを含めれば4種）がある。テープの声は、そのどれにも当たらないカワラエンマコオロギなる昆虫…さて一体？　実は北海道に多産し、本州中部域までその分布を伸ばすエゾエンマコオロギとは同一の種類。ところが多摩川原産のそれについては、明らかにエゾエンマの鳴き方とは異なっており、中流域の河原にのみ生息することから、あえてカワラエンマコオロギという俗称がついたのだ。テープの提供者、松浦一郎氏が昭和2年に多摩川の関戸橋下で初めて発見した珍品中の珍品である。その鳴き方は、エゾエンマが節回しを持つやや複雑なリズムを取るのに対して、カワラエンマは1音づつ間を置いた調子という、全く別なるもの。こうなると興味津々、一丁拝んでやろうと思うのは観察者の自然な欲求。しかしながら、夜の河原で声を聴き分けることはいささか重労働である。そこで徹底的にその違いを頭に叩き込む備えが必要であろうと、わざわざ前日講習会を開き、イヤと言うほど繰り返し両者の鳴き音を参加者に聴かせたのであった。

さて翌晩である。前日の過剰学習は、参加者の頭の中で2種類の音声が朝から鳴り止まないという状況を作り出していた。河原に到着した一行は、それでも聞き耳を立てる。おぉ～鳴いてる鳴いてる…でも頭で交錯してるヤツとは違う声ばかりだぞ…それもそのはず、エンマコオロギ、オカメコオロギ、ツヅレサセコオロギと、実に多様な種類のコオロギが鳴いていたのだ。新たに聴く何種類もの鳴き声、加えて意識の底で一日中ノイズを発している2つの音声も合わさり、音のスクランブルは究極に達していた。チリチリリンリンと高音域のリズムがチャンポンになって脳神経を刺激するのだ。ご存知だろうか、静かな闇の中でこのような音を聴き続けることで人の精神が壊れてゆくことを…「ウファーッ！」次々と頭を押さえながら倒れてゆく参加者たち、もはやこの世のものではない魔界の鈴の音が、頭の中で錯乱の旋律を刻んでいたのだ。そんなバカなことが！？


エンマコオロギの顔

カワラエンマコオロギの顔

思いもよらない現実を目の当たりして、ヒラオカ団員が咄嗟に起死回生の逆転技を放った。「♪君はファンキーモンキーベイビー！イカレテル～ヨ♪♪」耳をつんざく大音量は、念のため運び込んでいたラジカセと、偶然持ち合わせていた音楽テープによる合体攻撃。狂気の旋律は見事にかき消されたのである。一瞬にして己を取り戻した参加者たちの安堵の表情…が一転して恐怖に変じた。「うるせーぞ、この野郎！」突如現れた怪人物のシルエットは、河原を根城にしているホームレス。彼らの怒声に、参加者は四方八方へと逃げ出した。

慌てふためいて走るうちの一人が石につまずいて転倒した。しばらく転んだままだったがふと顔の近く、忘れようにも忘れられないあの音声が染み入るように聴こえてきた。「こんなことって…」目の前に横たわる大きな丸い石をどけると、大切な我が家の天井が急になくなり困惑したのだろう、一匹のカワラエンマコオロギが切なく翅を震わせていたのである。

その後、この珍しいコオロギは多摩川から姿を消し去った。この騒動が直接の原因ではないにせよ、何故かあの時そっとしておいてやればよかったのにと、後悔ばかりが先に立つ…

府中市郷土の森だより〈あるむぜお〉 No.56　発行日 2001/6/20　編集・発行　(財) 府中文化振興財団 府中市郷土の森
〒183-0026 東京都府中市南町6-32　TEL 042-368-7921　http：//www.fuchu-cpf.or.jp/museum/